

## 七 高尾殺しは虚談なり

その年は暮れて、翌萬治二年亥年となつた。去年、大明國永明王と云ふ王の軍師鄭成功と云ふ者から使者を長崎奉行までよこして、どうか日本から援兵を下さいと云ふ歎願の書を奉つたなど、云ふ評判もあり、今にも軍の始まるやうに風説をしたものもあるが、それも一時の事であつて其儘忘れたやうになつて仕舞つたから、今年は世上如何にも平和で、二月十一日から江戸本丸の普請が始まつた。其年の三月になつて仙臺では若殿の龜千代が生れた。後になつて陸奥守綱基と云れたのは此人である。それから五月に仙臺侯の初入部と云ふがあつた。全體、大名の初入部と云ふものは盛んな儀式のあつたもので、處によると花車を出して祭禮をしたり、をどり屋臺を出したり、強飯をふかしたり、餅をついたりして、民百姓まで盡く殿の萬歳を祝つたものである。多分仙臺でも此時色々な催しがあつたことであらう。さて仙臺侯は初入部をして、諸臣はそれ／＼謁見を賜はり、臣下も悉く當主の無事長久を祝つた。此處に分らぬ話がある、仙臺侯が三浦屋高尾を見受けされた處が、高尾には島田重三郎と云ふ色男があつたので、見受けされても仙臺侯には靡かない。そこで仙臺侯が怒つて三又の洲のわきで舟の中から高尾を斬つて大川に沈めてしまつたと云ふことである。これは講釋師などが得意にする話であるが何うも事實に合つて居ない。成程其頃、新吉原三浦屋に二代目高尾と云ふ遊女があつたに相違ない。今でも高尾の墓と云ふのが二つある。今戸橋の近所にある高尾の墓には碑面に地藏が彫つてあつて、上に紅葉の紋があり、右に轉譽妙信女、萬治三庚子十二月二十五日と彫り、左に「寒風にもろくも朽つる紅葉哉」と云ふ句が彫つてある。これは高尾が十二月に死んだと云ふ處から寒風と紅葉とを利

かせたのであらう。京の高尾は紅葉の名所である。しかしそれで見ると高尾が仙臺侯に殺されたと云ふのは眞赤な偽であつた。なぜなれば萬治三年十二月には仙臺侯はもう蟄居の身分である。蟄居の身分で居ながら新吉原へ出掛けて遊女を見受けして而も舟の中で之を殺すなど云ふ亂行の出来る譯はない。然るに三谷町の春慶院と云ふ寺にも高尾の墓がある。其墓には萬治二己亥年十二月五日とあつて同じ辭世が彫つてある。これも怪しい。多分、高尾の名が高くなつたので賣僧などが仙臺侯に殺されたと云ふ年月に合ふやうに一年早く繰あげて新しく造へたのであらう。而しこれも事實に合つて居らぬ。萬治二年十二月なれば仙臺侯は初入部で國に居られた時である。何ぼ陸奥守とても一つの身體を二つに分けて、半分は仙臺に居り、半分は高尾に通ふと云ふやうな輕業は出来ない。それ故仙臺侯が高尾を殺したと云ふ談話は先づ虚談と云つてもよい。

一 蟄居 江戸時代、士分以上に科した刑罰の一つ。閉門を命じ、一室にこもり謹慎させた事。

二 賣僧 不徳義な僧侶をのしつて呼ぶ語。